



日本国際看護学会 NEWS LETTER 第4号 2021

Japanese Society for International Nursing
NEWS LETTER 4th issue

2021年3月22日 発行

理事長挨拶

森 淑江 群馬大学大学院保健学研究科

2019年12月末頃に中国の武漢で発生し当初は原因不明の肺炎と言われていた新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）による感染症（COVID-19）のパンデミックは2020年のうちに終息するどころか、これによる世界中の感染者と死者が増え続け、行く末が見えない状況が続いています。世界の人口は78億人ですが、そのうち1億人以上が感染し、250万人が亡くなっています（2021年2月末現在）。人々の生活を、そして生命を脅かすCOVID-19に対し、私たち人類はまさに「人間の安全保障」をどう確保するかが問われています。ワクチン開発が急激に進み、世界中でワクチン接種が開始されていることは人々に希望をもたらしていますが、世界の隅々に行き渡り、この感染症が抑え込まれるには当分時間がかかることでしょう。

人々の生活や生命を脅かす要因は感染症だけではありません。貧困、自然災害、紛争、環境破壊など様々なものがあり、これらは先進国・途上国問わず生じており、しばしば一つの国には留まらず国境を越えてグローバルに関連しあって問題は拡大して行きます。

国際看護に関わる私たちは、日本国内や他国で住民一人一人の健康を維持・向上させる、即ち人間の安全保障を確保するという重要な役割を担っています。人々の安全が保障されてこそ、国や世界の安全が保障され、そして世界の平和につながると言えます。

現在世界中でCOVID-19と前面に立って戦っている医療者の皆様に感謝するとともに、その一翼を担う立場にある私たち自身も、何ができるか一人一人考えて行動することが求められています。

2019年12月末ころより新型コロナウイルス感染症が世界中で流行し、未だに収束の見通しが立たない。コロナ禍の中、私は、地域の高齢者施設や障害者施設、保育施設に出向き、新型コロナウイルス感染症対策や新しい生活様式について施設の職員と一緒に考える活動を行っている。高齢者施設や障害者施設における感染症対策は、その施設が立地する土地の文化や施設の特性によって、少しずつやり方が違っているように思う。私は、いつも新たな施設を巡回するにあたり、「今度はどんな施設かな？どんな悩みを持っているのかな？」と、不謹慎ながらワクワクしている。このワクワク感は、新たな発見や課題を現地の人と一緒に乗り越えるという国際看護のワクワク感と同様である。

私は中学生の時に、海外でボランティア活動をする看護職をテレビで観て、「かっこいい！私も看護職になりたい！」と思った。そして、単純明快な性格の私は、ここから青年海外協力隊に参加すること、看護職になることを目指すこととなる。最初に就職した先は、国際看護を目指すためにアセスメント能力や看護実践能力を高める必要があると考え、救命救急を専門とする病院を選んだ。そこで多くの仲間、そして今の私につながる感染症対策に巡り合った。私は、仕事も軌道に乗り充実していたが、青年海外協力隊に参加することを諦められず、募集に応募して夢への切符を手に入れた。夢への切符を運んでくれたのは、感染症対策の臨床経験であった。

私は、2年間、パラオ国立病院の感染症専従看護師として働くこととなった。しかし、自分に任されている仕事が思うようにいかず不甲斐なさを何度も感じ、ホームシックにもなった。そんな私を支えてくれたのは、ホームステイ先の家族や現地の同僚、他の青年海外協力隊員たちであった。私は、帰国後に自分に足りないものを補いたい思いに駆られ、感染管理認定看護師となった。

今の私の夢は、感染症対策と国際看護をつなぐ仕事を続けることである。看護の基本は、異文化における人の理解である。私は今後も常に心に「ワクワク感」を抱き、自分に立ちほだかる壁に挑戦し続け、世界共通に看護を提供できる人になることを目指したい。



パラオ国立病院にて手洗い指導
(右側が筆者)



パラオ国立病院救急外来にて

海外情勢： JICA海外協力隊員からの寄稿①

2020年4月COVID-19パンデミックにより、全世界のJICA海外協力隊が緊急避難帰国をしました。同時に新規の隊員派遣は延期となりました。2021年2月時点では、一部の隊員は再派遣となりましたが、そのまま任期終了となる隊員、派遣待ちの隊員も多くいる状況です。

今回はJICA海外協力隊のうち、派遣予定の隊員の方2名、幸運にも再派遣が可能となった隊員の方1名、避難帰国中に任期終了となった隊員の方1名に、それぞれの状況や思い、活動などについてレポートをいただきました。

「今、これからできることー夢は失わない」

2019年度3次隊（派遣予定）
トンガ 環境教育隊員
尾崎美咲

私は、これまで計画的に物事を進めるよりも直感を頼りに全て（留学、休学、JOCV等）を決めてきました。しかし、コロナの影響でJOCV派遣延期となり、今まで走り続けてきた人生にブレーキがかかり、自分と向き合う時間を過ごすことになりました。今は、派遣まで待機中です。なぜなら、大学の専攻で学んだ国際協力の実態を知り、その活動がどのような日本と世界の国益を生むことができるのか、最前線で経験を積み、将来の選択をしたかったからです。今後コロナの影響で派遣の可能性は薄いですが、それでもなお、他の国々との友好や共存に繋がる仕事を選びたいと考えます。

もし、「コロナがなかったら」とつい言ってしまいますが、今、未来が見えない状況に立たされているからこそ、今がよく見える気がします。当たり前だった自由な日常は、とても恵まれていたと感じます。現在、自由が制限され、くじけそうになりますが、我慢するのではなく、その気持ちを、他者と共有する勇気が大切だと思います。今、私達にできる社会貢献は家族や周りの人とのコミュニケーションを大切にし、お互いの心身を健康に保つことだと考えます。そして、コロナ禍でもできることを創り出すことです。今後、世界がどう変化していくのか、わかりませんが、一人の日本人として、私自身どんな環境でも強く生きていける人になろうと思います。

「未来遂行力」

2019年度3次隊（派遣予定）
ジンバブエ コンピュータ技術隊員
富田梨沙

「人生は、たった一つのこと動き、動かされる」。色鮮やかに輝かせていた未来は、一瞬にして暗黒に……。人生計画とは、あってないようなものだと知りました。でも派遣延期という予想外の時間を頂き、「狭い視野、近い将来」ではなく、人生観を大きく捉えることができました。私にとってJOCVは小学生からの夢でしたが、派遣待機をするのは2021年末までにしようと考えています。それは、派遣前訓練70日間を共に過ごした仲間との出会いがあったからでしょうか。これまで皆、異なる人生を歩んできたにも関わらず、国際協力に関心をもってJOCV候補生として出ました。そして、これからまた羽ばたこうとする仲間の様々な人生観に気付きました。そして今、COVID-19により「命に向き合い、人と同じ時間を共有できる尊さ」に気付いています。人と同じ時間/場所/空間を共有する機会が減り、人と人が離れていくような社会となりました。しかし、「互いの命がある時に、たった数分でも共有する時間を作ること」の尊さを一層感じるようになりました。

家にいるからといって、自分の意思や考え方を閉じ込める必要はありません。ITを駆使すれば、知識を蓄えることができ、人と人との繋がりも広げることができます。コロナ禍でも、Withコロナで実践できることに目を向け、それに取り組むことが、自身の未来を創る鍵になると考えます。

海外情勢： JICA海外協力隊員からの寄稿②

「JICA看護師協力隊員として感じる、COVID-19による配属先や活動の変化」

2018年度4次隊 ベトナム 看護師隊員
大森 美和

私は、2019年4月9日にベトナムに赴任しましたが、COVID-19のパンデミックのために日本に一時帰国し、約8カ月の待機の末に、2020年12月上旬にベトナム南部にある省総合病院に再赴任しました。ベトナムでは、保健省が医療の脆弱性を認識し、隔離とコンタクト・トレーシングを徹底しており、第5次感染者までの感染ルートを厳密に追跡しています。そのため、再赴任後に受けた私自身のPCR検査結果が判明するまで大変に緊張しました。配属先は、診療科19科930床の総合病院です。一部の門が閉鎖され、マスクを装着し職員の検温チェックを受けた後に敷地内に入ることができます。私は、「看護部」に所属し、各診療科を監査し改善活動を行っています。感染予防対策については、マスク装着と手指衛生の徹底、以前は1人で行っていた監査を同僚と実施することを協議で決定し、特に支障なく活動を行うことができしております。

病院では、感染制御部が中心となり、感染予防対策指導を各診療科に実施しています。職員は、防護服の着脱手順や手指衛生について定期監査でチェックを受けています。ベトナム国内においては、12月1日の市中感染を最後に、1月25日現在、市中感染は報告されていませんが、職員は気を緩めることなく、感染対策を行う事ができています。日常生活でも、公共の場面ではマスクを装着している人が多く、スーパーの入り口には手指消毒剤が設置され、街の至る所に保健省の感染予防啓発ポスターが掲示されています。

我々も感染対策に貢献するため、JICAベトナム事務所職員と隊員で感染予防啓発動画を作成しました。ベトナム保健省が企画した「Ghen Cô Vy」（原曲は「Ghen」（ベトナム語で嫉妬という意味）。そこに、「Cô Vy」（Ms. Vyという意味で、ベトナム発音がコヴィと、COVIDに似ている名前をあてている）を加えた替え歌）という曲に、ベトナムで馴染みのある手洗いダンス、保健省が啓発している感染予防のための5Kを取り入れました。5Kとは、下記ベトナム語の頭文字「マスク（Khẩu trang）」「除菌する（Khử khuẩn）」「距離（Khoảng cách）」「集まらない（Không tập trung）」「医療申告（Khai báo y tế）」から作られたキャッチフレーズです。インターネット <https://fb.watch/2EVA-dwsmT/>で公開していますので、ぜひご覧ください。コロナ禍ではありますが、ベトナムの医療の発展に貢献できるように、感染予防対策に十分に注意し活動を行って参りたいと思います。



保健省啓発5Kポスター



JICA海外協力隊 再派遣第1陣メンバーと撮影（写真右端が筆者）

海外情勢： JICA海外協力隊員からの寄稿③

「看護師協力隊員として感じる、COVID-19による任国での活動や住民の変化」

2019年度3次隊 ガボン共和国 感染症・エイズ対策隊員
城間美貴

私は、2019年1月末に、ガボン共和国のオートグエ州フランスビル市（首都から700kmほどの内陸部にあるコンゴ共和国との国境沿いの市）に派遣され、2020年の3月末（1年2か月滞在）に日本へ帰国しました。赴任先には、感染症・エイズ対策という保健医療分野の職種で派遣されていました。赴任先での活動は、エイズの外来クリニックで陽性者ボランティアと一緒に、来院者に対する予防啓発活動や、学校や母子保健センターに出向いて、助産師と一緒に児童生徒や住民へむけたエイズの予防教育を行っていました。

昨年3月にCOVID-19の患者が世界的に増え始めた時、地域や学校に出向く活動にまず支障ができました。ガボンでは患者がまだ出ていませんでしたが、学校が休校になりました。昨年2月初旬に中間報告をして活動計画を見直し、これから学校でシリーズ化した性教育（全3回）を実施する予定でしたが、この状況を受けて1回実施しただけで残りの計画は中止となりました。また、中国からCOVID-19が始まったと言われていることもあり、私に向けられる住民の視線が気になるようになりました。活動対象者の中には、簡単に話しかけられたりすることを快く思わない人もいたり、現状で大人数に対してのイベントをやるべきなのか迷ったりなど、外での活動が厳しくなりました。

また、勤務していたクリニックでの活動も、これまでのエイズ予防活動からCOVID-19の感染予防対策にシフトチェンジし、手洗いを始めとする、いろいろな感染症対策のための資料を追加で探したり、作り直したりと慌ただしくなりました。

ガボンの人たちの変化としては、まず、挨拶の方法が変わりました。これまでは、ハグをして頬ぺたを合わせたり、握手をしていたのが、代わりに肘を合わせたり、足のつま先を合わせたり、接触を減らす工夫を行っていました。また、もともとマスクをする概念はなかったのですが、マスクの必要性をすぐ理解し、キッチンペーパーに輪ゴムをホッチキスで止める即席の簡易マスクがはやり始めました。職場では、地元の職員が私の分も作ってくれ、私も一緒にそのマスクをしていました。このように、住民の変化は、早かった印象があります。

私は、今年の1月29日で派遣の任期が終了してしまったため、再派遣のチャンスは残念ながらありません。自分が学校で計画していた性教育のシリーズを、最後まで実施できず、効果を確かめられなかったのが心残りです。



地域の小学校でのAIDSの予防啓発の様子（写真右が筆者）



子供たちに日本の場所を確認中（写真中央左が筆者）

日本国際看護学会 第4回学術集会報告

第4回学術集会会長 伊藤尚子 山陽学園大学看護学部看護学科

COVID-19の国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態を勘案いたしまして、岡山県での実地開催を予定しておりました第4回学術集会は、Web開催となりました。

COVID-19の影響により、皆様方の生活やお仕事にも多大な変化をもたらしたかと存じます。本学会におきましても第4回学術集会の開催自体を検討することもありましたが、国際看護の知見の共有をはかる学術集会を中断させまいという意見のもと、開催の決定にいたしました。当初は本学会の前身である国際看護研究会からみても初の2日間開催という予定でしたが、この事態に右往左往しつつ短縮しての開催となりました。奇しくも初のWeb開催という運びになったわけですが、今後のハイブリッド形態による開催の布石となれば幸いです。

第4回学術集会は2020年11月22日（日）に『看護が具現化する人間の安全保障～看護による難民支援～』というテーマで開催いたしました。

「教育講演」と「シンポジウム」では国内外において難民に深く携わるの方々をお招きし、じかに現場で難民と接し続ける実践者であったり、当事者でなければわからないような貴重なお話しを提供してくださいました。現場で生じる課題も浮かび上がり、今後の支援活動や研究の可能性の示唆を得られるものでした。

「一般演題」では、4つの群で発表をしていただきましたが、国際看護の発展の広がりや深まりを感じることができ、また質疑応答も活発に行われて実地開催と変わらぬ“熱さ”にうれしく思った次第です。

さらに、「国際協力セミナー」で、青年海外協力隊の方々に海外での活動状況をご発表いただきました。若い方の現地で頑張る様子にどこか懐かしさを感じつつ、進化した国際看護の知識を身につけた実践力は頼もしくもありました。幅広い年齢層による発表となったこともこのたびの学術集会の魅力ではなかったかと思えます。

開催前の心配をよそに、これまでと変わらぬ参加があり胸をなでおろしております。多くの方々のご支援、ご協力の賜物と心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

第4回学術集会より、抄録集は学会誌として発行されるようになりました。参加されなかった会員の皆様におかれましては、学会ホームページで閲覧することもできますし、冊子として入手することもできます。ぜひご一読くださいませ。

日本国際看護学会 第4回学術集会報告

研究委員会・研修委員会の合同交流会委員
磯邊厚子, 戸田美幸 聖泉大学看護学部

昨今、地球規模の健康問題が頻発し、人々の健康がたえず脅かされている。移民や難民など人々の健康に直結する国際社会の問題も後を絶たない。そのような国際情勢の中で、国際看護学教育の果たす役割について議論することの意義は大きい。今こそ「グローバルヘルスに強いナース」が求められる時代ではないだろうか。そのため、本学術集会において、研究委員会と教育活動研修委員会との合同で、「グローバルヘルスに強いナースになる！－国際看護学教育の役割と未来－全ての人々に健康を」をテーマに交流会を開催した。

「グローバルヘルスに強いナース」を育成するためには、看護基礎教育が重要である。2022年度のカリキュラム編成に向けて、国際看護学はどのような位置づけとなり、どのような内容の充実が必要だろうか。各大学で検討段階と思われるが、今回、改めて学会の場で、「国際看護学教育の役割と未来」について自由討議の機会をもった。下記の大学の「国際看護学」の科目担当者に現状や課題について発表、提案をしていただいた。

それぞれの大学の国際看護学の位置づけ、取り組みを具体的に提示いただいた。必修もしくは選択科目であっても世界の健康指標や多様な人々の価値観の理解は共通の内容があり、具体的内容では、コミュニケーション力（多言語）や在日外国人対応～国際交流まで、幅広いプログラムが実践されていた。意見交換では、異文化理解を隣人同士から国レベルまで拡げることや、健康課題については国・地域に応じた看護の役割が示唆された。また、国際看護学の学習評価への取り組みや研究課題が示唆された。一方、看護教育現場で、「海外で働かないから」「語学力が弱いから」と国際看護学への関心が未だ乏しい。国際看護学はグローバル看護であり、単に語学力云々ではなく、幅広い知見をもちつつ、身近な人の声を聴くことであり、多様な人々から学ぶことである。全領域に共通した看護の原点があり、ライフサイクルの域を超えた看護学でもある。教育現場でグローバル看護の意義を示しながら、教育のスタンダードとしての科目、環境作りを推進する必要がある。国際看護学の研鑽を一層認識した交流会であった。

発表者

兵庫大学での国際看護学教育・研究の現状と課題（兵庫大学 大植 崇）

中医看護学のホリスティックな考え方を取り入れた国際看護教育と国際看護研究

（京都光華女子大学 呉 小玉）

本学における国際看護教育・国際看護研究の現状と課題（椋山女学園大学 奥川ゆかり）

今後の展望

本交流会でカリキュラム編成の一助のみならず互いの知見が広がった。現場教育や研究活動への還元が期待される。健康生活が脅かされるコロナ禍の今、とくに健康教育や疾病予防は看護の役割として重要である。世界の全ての人々へ健康が届くよう、今こそグローバルヘルスに強い看護師教育が要請されている。

日本国際看護学会 第5回学術集会ご案内

2021年の第5回学術集会は**Web**で開催する予定です。

会 期：2021年9月4日（土）

会 場：ZOOM

テーマ：レジリエンス！with/afterコロナにおける多文化共生

9月4日（土）9：00－17：00（予定）

基調講演：日本国際看護学会第5回学術集会大会長 近藤暁子
（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科）

プログラム：一般演題、シンポジウム

詳細は日本国際看護学会学術集会ホームページでご連絡いたします。

また、会員の皆様にはメールでもご案内いたします。

問い合わせ先：kokusaikango2021@gmail.com

第5回学術集会大会長あいさつ

2020年はコロナウイルスに振り回され、2021年になっても感染がなかなか収まらない中、国際的看護活動には制限があり、皆様におかれましては思うように活動できず、予定変更を強いられる状況が少なからず続いていることと思います。しかし、このような状況の中でも、またこのような状況であるからこそ私たちにできることを模索して活動されていらっしゃるのではないかと思います。また、逆にオンラインを通じての遠隔交流・教育活動により、世界の人々とのつながりを日々感じていらっしゃる方も少なからずあると考えます。

2021年の学術集会ではまだafter コロナという状況にならない可能性は高く、withコロナの状況をどのように乗り切ることが現在の課題となるのではないかと思います。

そこで、第5回学術集会は都心の非常に交通の便利の良い東京医科歯科大学を拠点に行く予定でしたが、コロナの状況の先行きが見えない中、オンラインのみで行うほうが無難で確実であると判断しました。「レジリエンス！with/afterコロナにおける多文化共生」をテーマに、世界で活躍されている看護職の方とオンラインを通じて交流し、知識や活動経験を共有したいと考えております。皆様のご参加お待ちしております。



編集後記

COVID-19パンデミックにより、世界中が大きな変化を強いられています。そんな状況の中、国際看護学は柔軟に対応しながら発展し続けていることを、NEWS LETTERをまとめながら感じる事ができました。

NEWS LETTER第4号では、JICA海外協力隊員の方からの寄稿もいただきました。寄稿にあたり、京都海外協力協会、沖縄県青年海外協力協会、JICAベトナム事務所、JICAガボン支所の方々にご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

これからもNEWS LETTERが皆様と知見を共有し学びあえる場であるよう広報委員一同、努めてまいります。皆様からのアイディアも引き続きお待ちしております！今後ともよろしく願いたします。

碓井瑠衣（東京医科歯科大学）